

総説

子どもの成長と絵本： 子どもの翼がはばたくために

脇 本 聡 美

Picture Books in Child Development: To Fly with the Wings of Imagination

Satomi WAKIMOTO

SUMMARY

This paper argues what those who concern children should know about picture books. Reading books to children gives them joy, and at the same time, it improves their ability for understanding and communicating. It also enriches their imagination. Moreover, it can be said that picture books can give children wisdom and strength to live by showing them that the world to which they belong is a beautiful place. From this viewpoint, offering children good books is our responsibility. So, the paper also considers what is essential for good books, and how we can cultivate our ability to choose good books for children. Finally, the paper discusses that screen media, such as TV, videos and computer games, can deprive children of the joy given by picture books, and points out the harmful influence of screen media on child development. In the light of that, the paper proposes that we should recognize the harm of screen media and convey it.

要 旨

本論文は、子どもの成長に関わる大人が絵本について知っておくべきことは何かについて論じている。絵本の読み聞かせは、子どもに喜びを与えるだけでなく、子どもの理解力やコミュニケーション能力を高め、想像力を豊かにする。さらに、自分たちのいる世界は美しいものであることを子どもに伝え、生きていくために大切なメッセージをもたらしてくれる。その観点から、子どものために絵本を選ぶのは大人の私たちがすべきことであると考え、よい本とはどういうものであるか、選ぶ目をどのようにして養うことができるかについて考察する。また、絵本の豊かさを享受する機会を子どもから奪いかねない映像メディアの危険性を指摘し、子どもに関わる大人がその危険性について認識し、伝えていく必要性をも明らかにする。

キーワード：読み聞かせ、想像力、大切なメッセージ、選書、映像メディアの危険性

はじめに

絵本は物語を文章と絵によって伝える。絵本や物語については、これまでも多くの研究者が論じてきた。絵本が題材とする昔話や物語を、口承文芸という文学の一形態として分析したマックス・リュエティや小澤俊夫の研究や、昔話や物語は、精神や魂の有りようについて描いたものであると精神分析学の観点からその重要性を指摘するブルーノ・ベッテルハイムや河合隼雄の研究は、絵本の可能性に多くの示唆を与えてきた。物語を伝える絵本を子どもの文学の一形態と考えるリリアン・スミスは、絵本の文学性について論じ、アニス・ダフは、自分の子育てにも言及しながら、絵本を含む子どもの文学の価値についてまとめている。また、絵本の出版に携わってきた立場から、松居直には絵本とは何かについて論じた著書があり、多くの絵本を翻訳している児童文学者の松岡享子には絵本の読み聞かせについての著書がある。ノートルダム清心女子大学の脇明子は、子どもが生きる力を育むのに物語がどのように関わるのかを論じ、読み聞かせや読書の必要性を主張している。以上のような研究を踏まえながら、本稿は、絵本が子どもの成長に大きな意義を持つことを認識し、そのことを子どもに関わる大人が理解し、読み聞かせという形で絵本を子育ての中に取り入れるための手掛かりを提供することを目的とする。また、ここでは絵本の読み聞かせの対象は、自分で内容を理解しながら読書をするのがまだしっかりとできない小学校低学年までの子どもとする。

絵本が幼い子どもに喜びや楽しみを与えてくれるだけでなく、子どもの想像力を豊かにし、こころの成長を支える貴重なものである、ということは誰もが認めるところであろう。絵本が子どもに生きていく力をあたえるという主張もある¹⁾。そのように絵本が子どもの成長に重要な役割を果たすものであるならば、数ある中から子どもたちに与える絵本を選ぶということは、育児に関わる大人にとって大きな責任を伴うということになる。一方で、子どもが絵本の恩恵を享受する機会を妨げる一番大きな要因と

してあげられる映像メディアの危険性について、子どもに関わる大人は、しっかり認識しなければならない。私たちが感じている以上に映像メディアは子どもの成長に悪影響を及ぼすことが指摘されている。本論文では、絵本が子どもたちの人生を豊かにしてくれることを再認識した上で、子どもの成長に関わる大人が子どもに与える絵本を選ぶ際に心に留めておきたい着眼点を示し、子どもが享受すべき絵本の恩恵を妨げる映像メディアの悪影響から子どもを守る必要性を明らかにする。

I

物語という文学的要素と、絵画という美術的要素を併せ持つ絵本は、松居が指摘するように総合芸術ということができる²⁾。絵本は物語を楽しむ喜びを子どもに与えるのだが、挿絵が果たす役割は大きい。挿絵は子どもが物語を理解し、物語の世界のイメージを作り出す手助けをする。美しい挿絵はまた、子どもに喜びを与えるだけでなく、子どもの感性を磨く³⁾。美しい絵に助けられ、耳から聞く物語の世界を自分のこころの中に作り出していく作業には、内容を理解する能力、物語に登場するものの心情を把握するための想像力が不可欠である。絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもは楽しみながら理解力や想像力を養う訓練をしているのだということが出来る。

理解力や想像力といった能力は、子どもがこれからの人生を豊かなものにしていくためになくてはならないものである。ダフは、自らの子育ての中で本がもたらしてくれた楽しみと幸福を振り返り、「本は、私たちにとって、“想像力の翼の贈り物”であった」⁴⁾と記している。ダフがまた、「私たちが子どもにかくも惜しみなく本を使ったのは、どんな場合においても、ただ単に、純粋に楽しかったからだということを強調しておきたい」⁵⁾と言うとおり、絵本の素晴らしい点は、子どもが生きていくうえで大事な能力が、楽しみとともに身に付くところである。

また、柳田邦男が「生きていくうえで一番大事なものは何かといったことが、絵本の中にすでに書かれている」⁶⁾と述べているように、優れた作品は子どもに人生の真実を語ることもできるのだ。多様な価値観が錯綜するこの世の中で、子どもが自分の人生の選択をしなければならないとき、幼いころに親しんだ絵本から感じ取った、幸せな人生のために真に大事なものが何であるかということが、その子にとって大きな支えとなるのではない。

たとえば、バージニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』⁷⁾では、物語はバートンのリズムのよいナレーションと、やさしい色使いで細かいところまで正確でありながら、生き活きた美しい挿絵で伝えられる。子どもは、「ちいさいおうち」が眺めて暮らす自然に囲まれたいなかの四季それぞれの美しさや楽しさに触れることができる。バートンの絵は、いなかの四季の移り変わりや、四季ごとの人々の暮らしの様子を実に細かくユーモラスに描き出している。しかし、次に「ちいさいおうち」の周りの美しいいなかの自然が、瞬く間に、雑然とした忙しく殺風景な「もう いつ はるが きて、なつが きたのか、いつが あきで、いつが、ふゆなのか、わかりません。いちねんじゅう いつも おなじようでした。」と語られる四季感のない大都会に様変わりしていく様子が描かれる。バートンの絵からは、のどかな風景が都市化していくスピードやパワーを感じることができる。その急激な変化を目にした子どもは、都市化で利便を追及する人間の開発にまい進する力強さも感じるだろうが、都市化に伴う自然破壊の凄まじさ、自然や四季を愛でるころの豊かさの消滅を強く感じ取るだろう。真に豊かな人生に必要なものは、利便性を追求することではなく、自然の美しさを感じるころを持つ環境ではないのか、といった大切なメッセージをこの絵本は子どもに伝えている⁸⁾。最終的に、都会で打ち捨てられ、ぼろぼろになってしまっていた「ちいさいおうち」がいなかに引越し、きれいになって、再び美しい自然に囲まれた環境で、四季の移り変わりを楽しみながら、お日さまやお月さまや星を見ることが

できるようになり、ひとも住んでめんどろをみてもらえるようになったという結末で、子どもは「ちいさいおうち」が感じている幸福感・安心感を共有するだろう。

松岡は、子どもは安心感を強く求めており、子どもがふれる本は「人生にたいして肯定的で、日なたのあたたかさや明るさを備えていなければならない」と述べている⁹⁾。バートンの『ちいさいおうち』では、「ちいさいおうち」の悲しみを理解してくれる人間がみつめてくれたことで、再び、のどかで美しい世界に戻ることができるという結末を迎える。この先子どもが生きていかなければならない厳しい現実の世の中で出くわす困難を乗り越えるために、『ちいさいおうち』は、それぞれに幸福や安心を感じられる場所がこの世界には存在するのだという、子どものころを支えるであろうメッセージを与えてくれることができるのではない。

『ちいさいおうち』のような優れた絵本は、物語の展開のおもしろさ、生き活きた挿絵の美しさ、子どものころを支える人生の真実を伝える力強さを兼ね備えている。優れた絵本とは、子どもが人生をしっかりと歩んでいけるよう、世界は美しいものだ、という希望と安心感を子どもたちに与え、困難に出会ったときには、「きっと大丈夫」とそのころを支えてくれるものではないだろうか。このような物語を読み聞かせてもらう子どもが、挿絵を見ながら想像力を働かせ、物語を理解する楽しみを味わい、人生において何が大切かを感じ取ることができるのであれば、子どもを育てていくのに絵本がどれほど素晴らしいツールであるかは明白であろう。絵本は子どもの成長を支え、生きる力を与えてくれるものであるということを絵本を読み聞かせる私たち大人が再認識したい。

II

次に、私たち大人が絵本について理解しておきたい点は、絵本は子どもに読ませるものではなく、保護者や保育者や教師といった子どもが信頼する大人

が子どもに読み聞かせるものだということだ¹⁰⁾。4-5歳にもなると、ひらがなは読めるという子どもがほとんどで、親は字を読ませるための教材として絵本を使うことになんの抵抗も感じない。一字一字たどどしく絵本を読むわが子を見て、これで自分の子どもには本を読む力が身に付いていると思込んでいる親も少なくないだろう。しかし、松居が「本を読むということは、字を読むことではなく、本の内容を理解すること」¹¹⁾だと指摘する通り、覚えばかりのひらがなを一字一字読んで、絵本一冊を読み終えても、やり終えたという達成感だけであっても、物語を理解し、絵本の楽しさを味わえたということはないだろう。芸術性に富んだ挿絵を見て想像力を働かせながら、耳から聞く物語を子どもが理解していくには、大人が絵本を子どもに読んで聞かせる必要がある。絵本は少なくとも就学前の子どもには、字を読ませるためのツールにすべきでないということを私たちが心に留めておかなければならない。小学生でも物語をしっかりと理解しながら読むことがまだ難しい低学年の時期は、自分で物語を読むための準備期間と考え、物語性に富む長めの絵本を読み聞かせるといいのではないか。

また、人生についての大切なメッセージを子どもたちが絵本から受け取る時に、その物語を自分の親であるとか保育者や教師といった、子どもが精神的に信頼している大人から読み聞かせてもらったのであれば、そのメッセージは子どもたちにとって、人生の大きな選択をする際に、より大きなこころの支えとなるだろう。

このように書くと、絵本の読み聞かせは、子育てにおける一大事のように聞こえてしまうが、絵本を読み聞かせることは、子どもに楽しみを与えるだけでなく、私たちにも幸せな時間をもたらしてくれる。優れた絵本は、大人にとっても楽しいものであるはずだし、自分も子どものころに好きだった物語を子どもと共有できるという楽しみもある¹²⁾。何より、私たちが読んでいる物語を一心に聞く子どもが、おもしろいことばやエピソードに出会ったとき、私たちと目を合わせてくすっと一緒に笑った

り、時には大笑いしてしまうときに感じる幸福感や喜びは、読み聞かせをしたことのある人なら誰もが経験したことがあるだろう。やってみると、子どもに絵本を読み聞かせることは、楽しいことだとすぐに実感できるはずだ。

このように、親と子どもが楽しくコミュニケーションを取るのに、絵本はたいへん有効なツールであると言える。たっぷり絵本を読み聞かせてもらった子どもは、楽しみながら想像力を使い、物語を理解するという経験を十分にしてきたわけであるから、読解力が自然に身に付いていることが多いだろう。しかし、ここでも私たち大人が気をつけるべきことがある。それは、絵本を子どもに読解力をつけさせるための教材だと考えないことだ。子どもに読解力を身に付けさせようという意図で絵本を読み聞かせていると、松居や松岡が指摘するように、読み終えた後、私たちは子どもについて内容を理解できているかどうかチェックするようなことをしてしまいがちなのである。このような行いは、子どもから絵本の楽しみを取りあげてしまうことになる¹³⁾。子どもの想像力という翼を信じて、大事に見守ることが私たち大人に求められる。

III

子どもが豊かな人生を歩んでいくための力や大切なメッセージを絵本が与えてくれるのであるならば、子どもによい本を選ぶということは、子どもを育てる私たちの役割だと考える必要がある。だが、数限りなく出版されている絵本の中から、そして、書店だけでなく公立図書館にさえ並ぶ商業主義の安っぽいシリーズものが多くを占める絵本コーナーの中から、どのようにすればよい絵本を子どもに選んであげることができるのだろうか。この章では、私たち大人が選書をするために知っておきたいことを考察したい。

子どもの本も文学として考えることを主張するスミスは『児童文学論』¹⁴⁾の中で、子どもの本を文学として評価するための基準を見出すことが彼女の著

書のねらいであるとしている。スミスは、私たちが子どもの本を評価するためのものさしは、「過去に書かれた最善の本に親しむことによって得たもの」でなければならない、優れた過去の本は、「私たちの試金石であって、それらによって私たちは、新しい本がこれらの巨人群と並ぶことができるかどうか、判断できるのである」と述べている¹⁵⁾。絵本についての章でスミスは、『ぞうのバパール』（ジャン・ド・ブリュノフ）、『げんきなマドレーヌ』（ルードヴィヒ・ベーメルマンズ）、『ピンのおはなし』（マージョリー・フラック）、『チムとゆうかんな船長さん』（エドワード・アーディゾーニ）、『ひとまねこぎる』（H. A. レイ）の5つの作品を「試金石」として考察し、5作品が共通して満たしているよい絵本の条件を挙げている。それは、「発想は新鮮で独自の空想に富んでいる」こと、「しっかりしたテーマ」があること、「はっきりしたプロット」を持っていること、主人公に「読者である子どもが自分と同一視できるもの」であること、である¹⁶⁾。このようにスミスは、子どもの本の評価にも一般の文学の基準を当て、その基準を満たすとして彼女が選んだ絵本は、時代の評価に打ち勝ってきた古典であり、現代の子どもも大人も楽しめる作品だと言える。

ただ、私たちのほとんどは、文学を専門的に学んできたわけではなく、スミスの提示する基準を常に持ち合わせて選書するという事は難しいだろう。もし、子どもに良書のみを提供する、という信念に基づいて運営されている学校図書館や私設図書館が近くにあり利用できるなら、是非利用したい。子どもの本についての専門的知識と、図書館は子どもを教育する場であるという信念で選ばれた本であれば、信頼して子どもに与えることができる¹⁷⁾。そのような図書館が近くになかったり、自身で本を選ぶ目を養いたいのであれば、本論文の参考文献に挙げているような、信頼できる絵本論を展開している著書で紹介されている絵本をまず読んでみることを薦めたい。巻末にある掲出図書一覧や索引が信頼できる良書のリストになる¹⁸⁾。しかし、子どもに関わることを職業とするのであれば、やはり、子どもに与

えるべきよい絵本かどうかを判断できる基準を身につけることは不可欠だろう。そのためには、自分自身で「試金石」となるような作品を多く味わうことが必要である。その「試金石」がどれであるかを知るためには、専門家に頼るのが一番だろう。多くの良い作品に触れたうえで、自分や子どもの好みも取り入れて選んだ本を読み聞かせるのが理想である。これは子どものためだけではなく、私たちにも楽しみを与え、人生を豊かにする機会となるのではないだろうか。

ここまでは優れた絵本とはどういうものか、また良書を選ぶにはどうすべきかを論じてきたが、次に選書にあたって文学的・芸術的価値に重きを置くという立場からは避けた方がよいと思われる絵本についても述べたい。それは、ディズニー絵本のような名作物語を絵本にダイジェストしたシリーズものだ。『ハイジ』や『宝島』や『バンビ』といった、作品によっては何百ページもの長さの古典的名作をたった30ページそこそこに縮めてしまった絵本では、あらすじを提示するだけで、もとの作品の文学的芸術性を伝えることは到底できないだろう。あらすじに文学的価値があるだろうか？また、あらすじだけの絵本に子どもに世界の美しさを伝え、生きるための支えになるようなメッセージを伝える力があるだろうか？答えは明白だろう¹⁹⁾。さらに、名作シリーズものの挿絵にも美術的価値があるとは言い難い。それぞれの作家の個性が宿る絵本の挿絵とは違い、シリーズものの絵はどれもアニメ作品風で、原色が多く使われ、同じような色彩、背景、表情で、画家の個性などは全く感じられない。安易に名作絵本のようなシリーズものに手を伸ばすのはやめて、長い時代の評価にも生き残ってきた真の価値ある絵本で培った目で、子どもを育てる私たちが楽しみと生きる支えを与えるような絵本を選んであげたいものだ。

IV

最後に、子どもが本を楽しむための想像力や子ど

ものこころの成長をを妨げるものとして、映像メディアの危険性について考察したい。『本が死ぬところ暴力が生まれる』の中で、バリー・サンダースは、「テレビは仮想現実である。それを体験した瞬間から、子どもは本の世界に戻るのが困難になる」²⁰⁾と指摘しているが、テレビ・映画・電子ゲームといった映像メディアは、子どもにとっても大人にとっても刺激的で、時として中毒となってしまうほどの魅力を持つ。子どもも大人も夢中になってしまう映像メディアは、物理的に、絵本の読み聞かせの時間、親子のコミュニケーションの時間、子どもの成長に不可欠な五感に響く実体験のための時間を奪ってしまうが、さらに深刻な問題を引き起こしていると指摘されている。

子どもの発達にはたくさんの要因が絡み合っているため、映像メディアが子どもの成長に悪影響を及ぼすと科学的に証明することは難しいが、医学の面からも警鐘が鳴らされている。2004年に、小児科医会と小児科学会がそれぞれ、乳幼児のテレビ・ビデオの長時間視聴や授乳中や食事時のテレビ・ビデオの視聴は避けるべきだとした提言を出した²¹⁾。提言が出されたときの小児科医会の「子どもとメディア」対策委員会副委員長だった田澤雄作医師は、注意力、集中力、記銘力、判断力を司る前頭葉²²⁾が、読書時には活発に動いているのに、テレビゲームをしている時は活動を停止するという事実から、メディア漬けになっている子どもの脳は健全に発達しないと結論づけ²³⁾、私たち大人が、テレビやビデオの便利な点だけでなく、暗黒面もしっかり学んで、脳（こころ）が成長する時の子どもたちを守る必要があると唱えている²⁴⁾。

脇によると、映像メディアの危険性は、子どもが想像力を使う機会を奪い、乳幼児のコミュニケーションを阻害することにある。お話を読み聞かせてもらっている時や、読書をしている時は、子どもは想像力を働かせ、自分でイメージを作り出すということをしているが、「映像メディア相手に育った子どもたちは、イメージを作る仕事は全部映像がやってくれますから、自前のイメージを作ることができ

ず」、後に自分で本を読むことができなくなると指摘する²⁵⁾。このように、映像メディアは、想像力という生きていく上で大事な能力を、物語によって培う機会を子どもたちから奪ってしまう。この観点で考えると、映像作品は出来や芸術性のよしあしに関わらず、映像で観ること自体が問題であると言える²⁶⁾。脇はまた、「赤ちゃんとまわりの人たちとのコミュニケーションを、メディアが阻害する」ことが何より大きな問題であると述べているが²⁷⁾、親子のコミュニケーションの希薄化は、子どもの言語発達の遅れや、今社会で問題視されている子どもや若者のコミュニケーション能力の低下を引き起こしていることは想像に難くない²⁸⁾。さらに脇は、今の子どもたちの保護者もテレビがついていて当たり前、ビデオで何度も番組を見るのも当たり前という時代に育っていることに触れ、「これまで以上に深刻な問題が起こってきても不思議ではありません」²⁹⁾と懸念する。

ここで、映像の内容が子どもの知的好奇心を引き起こすようなものであったり、芸術性の高いものであったりした場合でも、映像メディアは子どもに危険性のあるものだと言えるのだろうかという疑問が出てくるかもしれない。大切なのは子どもに見せる内容をスクリーニングすることだけでなく、大人が子どもを映像メディアにさらす時間を自制できるかどうか、また子どもに自制させられるかどうかではないだろうか。例えば、NHK教育テレビでは、朝夕の家庭の一番忙しい時間帯に、CMなしのノンストップで、5分から15分の番組が2時間放映される。この中には保護者が子どもに見せたいと思うような教育的な内容の番組も含まれている。しかし、優れた内容であっても、若い子どもが毎日何時間もテレビを見続けることは、脳の発達にも、コミュニケーション能力の発達にも悪影響を及ぼすということは明らかである。保護者が映像メディアに接する一日あたりの時間をきちんと決めて、子どもの生活に取り入れるのでなければ、映像メディア中心の生活にいと簡単に陥ってしまうだろう。子どもが映像メディアに釘付けになっている方が手早く用事を

すませられるため、保護者にとっても映像メディアはなくてはならないものになりうるというのも事実である。子どもを映像メディア漬けにしてしまう要因は、保護者の側にも潜んでいる。暴力的な映像が子どもへ悪影響を及ぼすということは誰の目にも明らかであるが、保護者にも子どもにも自制心がなければ、たとえ内容が教育的に芸術的に優れていても、映像メディアは子どもの発達に危険なものになってしまう。

映像メディアの危険性について二人の専門家が指摘することを中心にまとめてきたが、私たち子どもを育てる大人が、映像メディアをコントロールしなければ、子どもが絵本の恩恵を受けることを妨げるだけでなく、脳（こころ）の発達にも害を及ぼすことをしっかり理解する必要がある。テレビの時代に育ってきた保護者自身も映像メディアの誘惑に打ち勝たなければ、子どもを映像メディアの悪影響から守ることはできないということを認識していなければならぬだろう。子どもの成長に関わる大人が映像メディアの危険性についてきちんと把握し、子どもや、場合によっては知識や自覚を持たない保護者にも伝えていく必要があるのではないか。

おわりに

優れた絵本は、子どもに物語を理解する力、物語の世界のイメージを作り出し、登場するものの心情を汲み取る想像力を養う。また、『ちいさいおうち』を例に示したように、子どもが豊かな人生を送るために支えとなるような大切なメッセージを絵本は伝え、子どものこころを成長させる。そのような絵本の力を引き出すために、私たち大人は、絵本が子どもに字を読ませたり、読解力を身に付けさせるためのツールであると考えべきではない。子どもの想像力の翼を信じて、絵本を楽しむ気持ちを持って、読み聞かせることが大事だということを認識すべきだ。そして、優れた絵本を選んで子どもに手渡すことこそが、子どもを育てる大人の役目だと理解しなければならない。選書の目を養うには、「試金石」

となる本に数多く親しむことが必要である。「試金石」となるのは、やはり、時代の評価に耐え抜いてきた古典と言われる作品だ。信頼できる専門家が選んだ、真の価値ある絵本を手にすることからまず始めたい。最後に、子どもを絵本から遠ざけてしまう映像メディアは、子どもの想像力を豊かにする機会を奪ってしまうだけでなく、子どもの脳（こころ）の成長にも害を及ぼすことを認識しなければならない。子どもを映像メディアの悪影響から守ることは、私たち大人の責任である。私たちにも子どもにも豊かな人生と楽しみをもたらしてくれる絵本のよさを再認識し、絵本が子どもの育ちにうまく取り入れられることを願う。

注

- 1) 協明子 わたしたちは、子どもたちが「この困難な世の中でなんとかうまく育っていくのに、本を読むことが大きな助けになると、直観的にわかっている」と述べている。(『読む力は生きる力』岩波書店 2005、2008 vi) ブルーノ・ベッテルハイムは、昔話のような「物語のテーマは、道徳性でなく、いつかは成功するだろうと、安心感をもたせてやることなのだ」と述べている。(『昔話の魔力』評論社 1978、1999 p27)
- 2) 河合隼雄 松居直 柳田邦男『絵本の力』岩波書店 2001、2009 p7
- 3) アニス・ダフは、「美しいものを共に見て喜ぶということはどんなに早くから始めても早すぎるということはありません。」と述べている。(『つばさの贈り物』大江栄子他訳 京都修学社 2009 p20)
- 4) ダフ 『つばさの贈り物』 p4
- 5) ダフ 『つばさの贈り物』 p6
- 6) 『絵本の力』 p87。 同書の中で河合隼雄も、絵本は「魂の現実がいちばん表現しやすい媒体」と指摘している。 p144
- 7) バートン、バージニア・リー 『ちいさいおうち』 石井桃子訳 岩波書店 1954

- 8) ダフは、『ちいさいおうち』が好きになっていった自分の息子について、「月のひかりのなかでおどっているりんごの木を永遠の喜びと感じる心が育まれていったのです。」と述べている。(p66)
- 9) 松岡享子 『えほんのせかいこどものせかい』日本エディタースクール出版部 1987、2010 p62
- 10) 福音館書店で長年編集長として絵本の出版にたずさわってきた松居は、「絵本の編集者になって、絵本は子どもに読ませる本ではないという編集方針を第一番に打ち出し」、絵本は「大人が子どもに読んでやる本」であると断言している。(『絵本の力』 p51-2)
- 11) 松居直 『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973、2003 p3-4
- 12) 柳田邦男は、自分にとっての絵本論は、「人生に三度読むべき絵本」というキャッチフレーズで表現できると述べている。「人生に三度」とは、「まず自分が子どもの時、次に自分が子どもを育てている時、そして自分の人生の後半に入った時という意味です。」(『絵本の力』 p87)
- 13) 「絵本の表紙を開いて、“むかしむかし”とはじまった瞬間から、子どもは物語の世界へはいりこみ、物語の世界を旅しているのです。そして、“おしまい”となっても、しばらくは物語の世界の次元で、いろいろと空想を働かせています。この時間に、子どもの自由な想像の翼は、空想の世界にはばたいて想像力をますますかきたてています。この貴重な瞬間に、おとなは質問という土足でこの世界をめっちゃめっちゃに踏みこじってしまいます。」(松居 『絵本とは何か』 p16) 「一つ二つのことばを学ぶことよりも絵本の世界にはいりこむことの方が、ずっと大事です。そうした経験によって、子どもの心が広がっていくのですから。途中ではさまれる過度の質問や説明は、お話の流れをせきとめて、子どもを物語の世界から現実のお勉強へひきもどします。(松岡 『えほんのせかいこどものせかい』 p22)
- 14) スミス、リリアン・H 『児童文学論』 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳 岩波書店 1964、2008
- 15) スミス『児童文学論』 p35。松岡も絵本を見きわめる目を養うには、“満25歳以上”の絵本を読みまじょうと述べている。(『えほんのせかいこどものせかい』 p51)
- 16) スミス『児童文学論』 p232
- 17) 神戸市立渦が森小学校では、学校図書館は教育を目的とし、良書のみを提供するという理念で運営されている。また、専門家による勉強会に参加した保護者や地域の人が、ボランティアとして絵本の読み聞かせや図書館の運営にもたずさわり、小学校と家庭・地域が連携して子どもがよい本に出会う環境を作り出している。(http://www.city.kobe.lg.jp/child/education/program/forum/img/20forum2.pdf)
- 18) たとえば、『絵本とは何か』では掲出図書一覧、『読む力は生きる力』では本書でとりあげた書目としてリストになっている。
- 19) フランシス・クラーク・セイヤーズは、ウォルト・ディズニーが名作をもとにした映画や絵本を作る目的は商業的成功であり、そのためにもとの作品を都合のいいようにゆがめてしまっており、その結果、作品のもつ芸術性は損なわれ、子どもが働かせる思考力や想像力を全く尊重しないものにしてしまったと批判している。(『ウォルト・ディズニーの功罪』子ども文庫の会 母親文庫① 1967、1994) 松居もディズニー絵本をはじめとする名作絵本は「まっ赤なにせ物」で「子どもたちに絵本を準備するには、まずこの名作絵本を捨てることから始めていただきたい」と述べている。(『絵本とは何か』 p39) 脇は、「パターンに乗せ」るだけで「売れることは保証つき」のシリーズものは、本を提供する側にも「誘惑の種」と指摘する。(『読む力は生きる力』 p117-8)
- 20) サンダース、バリー 『本が死ぬところ暴力が生まれる』杉本卓訳 新曜社 1998、2003 p175
- 21) 小児医会から出された具体的提言は、1. 2歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えまじょう。 2.

授乳中、食事中のテレビ・ビデオの視聴は止めましょう。 3. すべてのメディアへ接触する総時間を制限することが重要です。1日2時間までを目安と考えます。テレビゲームは1日30分までを目安と考えます。 4. 子ども部屋にはテレビ、ビデオ、パーソナルコンピュータを置かないようにしましょう。 5. 保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくりましょう。の5項目にまとめられている。小児科学会の提言もほぼ同じような内容だが、テレビ・ビデオの長時間視聴は、その内容や見方によらず、言語発達が遅れる可能性が指摘されており、乳幼児に一人で見せることは避け、親も一緒に観て、問いかけに答えるようにすることを薦めている。

- 22) 田澤雄作 「脳の前面、目の後ろ、額の後ろにあるところが前前頭葉です。前前頭葉の働きとして重要なのは、笑顔、言語、感性の場であるというところなのです。」(「子どもにメディア・ワクチンを!」『いま、子どもたちがあぶない!—子ども・メディア・絵本』斎藤惇夫他、古今社 2006、2009 p47)
- 23) 田澤 p45-6
- 24) 田澤 p64
- 25) 脇 『読む力は生きる力』p79
- 26) 脇明子 「メディアが生きる力を脅かす」『いま、子どもたちがあぶない!—子ども・メディア・絵本』斎藤惇夫他、古今社 2006、2009 p90
- 27) 脇 「メディアが生きる力を脅かす」p95
- 28) 2010年に出された小児科学会の提言では、「現実世界でのコミュニケーションの希薄化は、親子・家族・人間の絆の希薄化に繋がりますが、これらの根元には、赤ちゃんのときからの過剰な映像メディアとの接触、行過ぎた競争教育社会、睡眠を含めた不適切な養育環境などがあります」という文言がある。
- 29) 脇 「メディアが生きる力を脅かす」p88-9

参考文献

- 小澤俊夫 『昔話とは何か』小澤昔ばなし研究所 2009
- 桂宥子編著 『たのしく読める英米の絵本』ミネルヴァ書房 2006
- 河合隼雄 松居直 柳田邦男 『絵本の力』岩波書店 2001、2009
- 河合隼雄 『ファンタジーを読む』講談社 1996、2006
- 斎藤惇夫 田澤雄作 脇明子 中村柊子 山田真理子 『いま、子どもたちがあぶない!—子ども・メディア・絵本』古今社 2006、2009
- サンダース、バリー 『本が死ぬところ暴力が生まれる』杉本卓訳 新曜社 1998、2003
- スミス、リリアン・H 『児童文学論』石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳 岩波書店 1964、2008
- セイヤーズ、フランシス・クラーク 『ウォルト・ディズニーの功罪』子ども文庫の会 母親文庫① 1967、1994
- センダック、モーリス 『センダックの絵本論』脇明子 島多代訳 岩波書店 1990、2009
- ダフ、アニス 『つばさの贈り物』大江栄子他訳 京都修学社 2009
- ベッテルハイム、ブルーノ 『昔話の魔力』評論社 1978、1999
- 松居直 『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973、2003
- 『松居直のすすめる50の絵本』教文館 2008、2009
- 松岡享子 『えほんのせかいこどものせかい』日本エディタースクール出版部 1987、2010
- リューティ、マックス 『昔話の本質』野村?訳 筑摩書房 ちくま学芸文庫 1994
- 脇明子 『読む力は生きる力』岩波書店 2005、2008
- 『物語が生きる力を育てる』岩波書店 2008